国東市 総括会議 ハピカム ミライデザイン会議

大分合同新聞社が、次代を担う若手リーダーと一緒に地域の未来を考えるミライデザイン会議「ハピカム」第5弾国東市編が12月1日、同市のくにさき総合文化センター（アストくにさき）などで行われた。「1次産業」「観光資源」「創造創出」の3分科会の議論を経て開かれた総括会議では、分科会で出された地域活性化のアイデアをさらに深く話し合った。その中では、おいしいのに埋もれている農水産の逸品を売り出すための「くにさき便」、観光PRのための観光課を大分空港に移転、お坊さんがガイドする峯道ロングトレイルなど、分科会でのユニークな提案が再度紹介され、他分科会の意見も交え実現の可能性を探った。国東には外部の人と交流しながら文化を醸成してきた長い歴史がある。現代でも「異人」の視点と内部の視点を融合して、価値を創造していく重要性が指摘された。参加者はこの日の出会いと議論をこれからの地域づくりに生かすため、今後も異業種間の連携を深めていくことを誓い合った。

■ウェブ　http://www.oita-press.co.jp
■スマートフォン　http://www.oita-press.co.jp/h-come/

主催／大分合同新聞社　共催／国東市　国東市商工会
協賛／国立大学法人大分大学　（株）大分銀行　豊島酒造㈱　（株）NTTドコモ九州大分支店　日本たばこ産業（株）熊本支店

大分空港に市の観光課移せ

「1次産業」分科会

直販であるとか朝市での魚の販売などを通じて「消費者に顔の見える」生産活動を続けていることが紹介された。食べる人がおいしいと言ってくれる瞬間のためだけに積いっぱい品質のいいものを作り続け、捕り続けているという1次産業への誇りについても語られた。その上で、現代は安心・安全な食べ物が求められているが、消費者がそれに見合った値段をつけてくれない状況がある。国東は少量生産の品目が多いので、大分空港を使っての販路拡大が「コスト面で合わないという課題提起がなされた。そこで、中身に何が入っているか決まっていないが、「くにさき便」として国産ブランドになる可能性があるというアイデアが出された。どうマッチングさせるかや具体的手段など課題があるが、少量多品目を逆に特色として生かしていってはどうか、日常で食べるのではなく、ハレの特別な日に食べられる質の高い食品づくりを目指していこうと提案された。その共通理解を深めていくことで、観光分野の人も巻き込み、地域を活性化させて国東観光客が帰ってくるようになれば素晴らしいという結論がまとめられた。

「観光資源」分科会

国東市に統一したキャッチフレーズが必要、またこのキャッチフレーズをふれずに貴き通すことが必要だと提起された。つ、キャッチフレーズが決まり、シールにして一次産品などに貼れば、それだけでブランドになる。また、国東は大型バスで動く観光は合わない、遠が短く、受け入れ態勢など考えると、基本的には少人数での観光が適している。来てもらうためには、祭りやロングトレイルなど動機付けがなければいけないし、シイタケなどおいしいものがたくさんあるが知られていないのでPRするなど必要ではないか。大分空港に市の観光課を移し、市の職員もホテルなどで研修を積んで「いらっしゃい、お帰りなさい」のおもてなしができれば面白いとの提案も。今後の核になり得るものとして国立公園の指定の可能性を探る。また、国東は大型バスで動く観光は合わない、遠が短く、受け入れ態勢など課題も多いと報告された。ロングトレイルに関して、お坊さんがガイドになって峯道を歩く興味深いアイデアが出た。住民の協力も得られ、遠など荒ぶされる心配もないのではと、との話になった。

「創造創出」分科会

地域資源の活用をキーワードにして話を進めた。市ではくにさき雇用創出事業展（まんだら）という事業を進めており、その中からいくつかの取り組みが始まっている。今富さんは古家の解体と再生で、これまで資源ではなかったものを地域資源として再利用することで雇用創出や新産業創出に結び付けようとしている。また、鶴川商店街にも古材を使い空き店舗を改装したシャールーム的な情報発信の拠点施設を造り、町づくりに生かそうと計画中。同事業ではペット美容業の松林さんが、捨てられていた魚の骨や雑魚を使ってペットフードを開発。製造での雇用も生まれている。松林さんからは犬を活用した地域振興の提案も出された。畑ディレクターの白石さんから、西洋野菜のアーティチョークを新たな地域資源として栽培や地域の連携に結び付けるよう取り組みをしたいとの話が出た。分科会全体として、これまで捨てられていた物や地域の資源と見なされなかったような物を有効活用することで雇用や産業が生まれ、地域の発展・町づくり・人づくりにもなるという視点で議論が進められた。

まれびとの目と批評する目

食と観光が一体的PR

秋吉　観光資源分科会でも、国東の産品をブランドにしたいという話が出ました。定刑便の消段階の話ですが、うちの寺で地元の方が小屋を借りてシイタケや椿取れた野菜を持ち寄って、直販をしました。お米も袋に連絡先を書いて売ると、次の年にお買いしかったから買いたいと連絡があった。自分はそういうことを地元の人ともっとやっていきたいと思っています。食べ物がさっぱりでお寺にお参りに来てもいい。お寺がさっぱりで国東のうまいものに気付いても、自分は地元の人間なので国東のブドウがおいしいと知っています。場所を提供するので直販をやってもらいたいと思います。先はと言葉の力という話が出ましたが、地域の人が来て売った後に「さあ、後は上に行ってお参りしておいで」と言ってくれることが一番説得力があります。寺に上がる前に「をびを潤して」と一杯もらったら、帰りにはそこに寄られたいかんと思うとか。そういう地域を一体の観光であるべきではないかと思っているので、発信拠点として使ってもらえるならどんどん使ってもらいたいと思います。

観光資源／若手リーダー
Buncho Akiyoshi
秋吉 文椿 さん
国東市国東町、34歳。文殊仙寺創住職。大正大学を卒業後、2008年に帰郷し実家である日本三大文殊の一つ、文殊仙寺の創住職を務める。

下川　やっていく所がありますか。

徳丸勝幸（観光資源分科会）　能登空港が全国で唯一やっています。

下川　やっている所があるので、できないことはないです。後は市長がどう決断するかに懸かっています。やれば大きなニュースになり全国に発信できます。それからもう一つ、観光資源分科会でお坊さんが案内するロングトレイルが出ました。これも面白いと思います。ロングトレイルに付加価値が付くのでは。ロングトレイル構想自体が始まったばかりで、クリアする課題が多いですが、他地域との差別化を図るため実現に向けて頑張っていただきたいと思います。次に、創造創出分科会では、地域でこれまで資源と思われていなかった物に資源として光を当てる逆転の発想が紹介されましたが、今富さんに説明をお願いします。

ちょっとしたこと発見

今富　地域は都会を目指して都会に近づくように発展していく中で、多くの地方都市が今まであった多くの物を捨ててきた歴史があります。その結果日本中似たようなところばかりできてしまいました。一方、国東は「陸の孤島」で、線路がないからこそ残された文化が多くある。僕も年間東京にいて、たまに田舎の物を食べたくなるんですが売っていなくて、実家から送られてくるとすごくうれしかったです。国東出身の人に販路を拡大していくという出口がいんじゃないかと思うんです。競争にならないですし。

下川　きょうをきっかけに一歩踏み出してやってみようと感じますか。

都留　気分としては一歩も二歩もどんどん進みたい。ただ、気持ちが後ろに向いてしまうことが多いですね。どうやってそこにたどり着くかの道筋が見えてこないからです。

食と観光が一体的PR

秋吉　観光資源分科会でも、国東の産品をブランドにしたいという話が出ました。定刑便の朝段階の話ですが、うちの寺で地元の方が小屋を借りてシイタケや椿取れた野菜を持ち寄って、直販をしました。お米も袋に連絡先を書いて売ると、次の年にお買いしかったから買いたいと連絡があった。自分はそういうことを地元の人ともっとやっていきたいと思っています。食べ物がさっぱりでお寺にお参りに来てもいい。お寺がさっぱりで国東のうまいものに気付いても、自分は地元の人間なので国東のブドウがおいしいと知っています。場所を提供するので直販をやってもらいたいと思います。先はと言葉の力という話が出ましたが、地域の人が来て売った後に「さあ、後は上に行ってお参りしておいで」と言ってくれることが一番説得力があります。寺に上がる前に「をびを潤して」と一杯もらったら、帰りにはそこに寄られたいかんと思うとか。そういう地域を一体の観光であるべきではないかと思っているので、発信拠点として使ってもらえるならどんどん使ってもらいたいと思います。

1次産業／アドバイザー
Katsuyuki Mori
森 勝之 さん
大分市出身、44歳。1991年に九州旅客鉄道入社。2010年に JR九州ファーム大分代表取締役社長に就任。農業ブームの今後が楽になる。

下川　まず1次産業の中で、「おいしい」の一言のためにやっていると出ました。いい物を食べてもらいたいということに感じる思いを都留さんに語ってもらいたいと思います。

都留　自分がおいしい物はおいしいですし、それで生活が成り立っていけばうれしいです。自分がおいしくない物は作りたくない。時季にもよりますが、おいしい物をおいしく食べてもらいたいですし、それに見合った金額がほしい。それだけです。

下川　それに見合った金額が手に入らない現状があるんですか。

都留　そうですね。やはり消費者は安い方がいいですし、自分もそう思います。ただ、値段にはそれだけの理由があるということがあり理解されていないんじゃないかと。自然を相手にすると、同じ物が同じように作れるわけではないんですが、農業者が少なくなったことが、理解されないことにつながっていると思います。その辺を見直してもらいたい気持ちがあります。

航空会社の戻り便活用

下川　一方では、これは高いんじゃないかなというものが売れることがあります。

都留　それはそれなりに、量が少なかったり、品質が高いなど理由があってのことだと思います。人間の味覚はそれぞれ違うので、それがいいという人もいれば口に合わない人もいます。ただやはり、田中さんが言ったように、言葉でみんなが食べ比べて、高くてもおいしいと自分の口にあった価値にお金を出していると思います。

下川　そこは本質ではないと感じますが。

都留　本質は本質ですが、それが絶対の本質ではないと思います。それだけがおいしいのか、という話になります。お米がおいしい人はパンを食べないのか。それはないと思います。

下川　都留さんとか他の生産者の方が絶対の自信を持っている農水産品の価格や魅力を、上げるとか広める方策で思い付くことがありますか。

都留　分かっていればもう売っています。分からないからこういう場に来てみたり、いろいろ手を出したりしてるんです。そういう方策があれば、もうみんながしています。

下川　方策がないという中、分科会で「くにさき便」という提案が出ました。産品に付加価値を付けるという意味で起爆剤になるでしょうか。

都留　これといった産物がない国東で、どういうものが現れているから他地域の人に分かってもらえればうれしいです。国東でブドウを作っているのは聞いたことないですよね。

下川　あまり知られてないですね。

都留　それが引分は興味しんんです。ちょっとしたことでもいいので関知できればうれしいです。

下川　きょうハピカムがあったことで、国東支局も消えはずです。周知を確約します。くにさき便が周知のきっかけになればということですが、アイデアはすごくいいと思います。ただ空輸すると なと、やはりネックはコストではないか。そこを解消する方策について森さんにお聞きします。

森　国東が一番空港に近いので、鮮度での優位性は高い。民間便で航空会社に何かメリットがあるというのですが、分科会では都留さんが「1回来てみたいい」と話していました。その意味で行きは貨物だけが運ばれる旅客が乗れば航空会社にもメリットがあります。貨物コンテナだけ借りて送る方法はあるんですが、戻り便がないと難しい。戻り便が空になるがに何か運ぶ物があるといいなと思います。

今富　お話け便についてですが、パッケージ事業の中で数社が集まって国東の幸お福行便を検討しているので、そちらに参加してもらえると業種も増えて面白いんじゃないかと思います。僕も年間東京にいて、たまに田舎の物を食べたくなるんですが売っていなくて。実家から送られてくるとすごくうれしかったです。国東出身の人に販路を拡大していくという出口がいんじゃないかと思うんです。競争にならないですし。

下川　きょうをきっかけに一歩踏み出してやってみようと感じますか。

都留　気分としては一歩も二歩もどんどん進みたい。ただ、気持ちが後ろに向いてしまうことが多いですね。どうやってそこにたどり着くかの道筋が見えてこないからです。

食と観光が一体的PR

秋吉　観光資源分科会でも、国東の産品をブランドにしたいという話が出ました。定刑便の朝段階の話ですが、うちの寺で地元の方が小屋を借りてシイタケや椿取れた野菜を持ち寄って、直販をしました。お米も袋に連絡先を書いて売ると、次の年にお買いしかったから買いたいと連絡があった。自分はそういうことを地元の人ともっとやっていきたいと思っています。食べ物がさっぱりでお寺にお参りに来てもいい。お寺がさっぱりで国東のうまいものに気付いても、自分は地元の人間なので国東のブドウがおいしいと知っています。場所を提供するので直販をやってもらいたいと思います。先はと言葉の力という話が出ましたが、地域の人が来て売った後に「さあ、後は上に行ってお参りしておいで」と言ってくれることが一番説得力があります。寺に上がる前に「をびを潤して」と一杯もらったら、帰りにはそこに寄られたいかんと思うとか。そういう地域を一体の観光であるべきではないかと思っているので、発信拠点として使ってもらえるならどんどん使ってもらいたいと思います。

観光資源／アドバイザー
Hiromichi Inoue
井上 博道 さん
福岡県出身、36歳。JTB九州大分支店営業課ブループリーダー。2002年入社と同時に大分に配属。大分の山をジープやスニーカーで踏破した。

下川　それは今富さんが取り組んでいる古家の再生ももちろんですし、もう一つベットフードにも考え方が通じると思いますが。

今富　おいしい剥し身の残り物は捨てられていました。これは松林君（松林智宜・創造創出分科会）じゃなきゃ気付かなかったんですね。彼自身が気付いて、家業でやっているペットに対して商売的に何かできないか工夫した結果です。

下川　そのあたりの発売として雇用などを生み出す魅力について、後藤さんはどう考えますか。

後藤　創出していく魅力という。何か生み出していく中で、日本全国にも同じような商売はたくさんあり、しかも情報化の世の中ではすぐまねされます。似たような物の中で差別化をどうするかが大命題です。地方というキーワードが日本が差別化になる。きょう感じたのは、国東は横のつながりが非常に活発だということです。くにさき夜家雛という話もありましたし、異業種が横の連携を取っている事例もたくさんあります。そこから何か生み出せるのかなと感じています。ビジネスモデルで本当に目新しいものはそんなにないんです。ここで聞いたことのある事業を、ちょっとお客さんのニーズに合わせて変えて成功した事例が多いのです。そのちょっとしたことを見つけるのが大事です。その意味で、自分の世界だけではないこうした横のつながりがあることは素晴らしいと感じています。ミライキーワードで今富さんが「異人」と出ていたのですが、外からの目を入れることが大事なんじゃないかなと。白石さん（白石剛紀・創造創出分科会）が東京から国東に来て、東京から見た国東のお話を聞きましたし、ベットフードも松林さんはやればよく気付かなかったということですが、国東の人でなければ気付かないとか、外の人じゃないと気付かないとか、いろんなちょっとしたことを見つけられる体制をつくっていくべきと思います。

ミライキーワード発表

下川　もう一つ分科会でアーティチョークの話が出ました。白石さん説明していただけますか。

白石　（実物を見せながら）これはヨーロッパで野菜の消費量第3位くらいに入る、ヨーロッパでは知らない人がいない野菜です。花が咲く前のつぼみを食べます。これの栽培と、食べる花頭をつくりたいと考えています。道を走っていても遊休農地が多いので、そこに食べられる花を一面に植えて、これは全部食べられる畑だとPRすれば、来るきっかけと一石二鳥になると思います。

下川　国東にとって新しい産物になるんですね。

白石　そうです。僕が今やろうとしている面積だと将来的には日本一になる予定なので、これを核に花畑とか食べる花で人を呼べたら地域のためになるかなと思っています。

下川　都留さん、同じ1次産業という目で見て どう思いますか。

都留　すごいなと思います。自からうろうろですね。既存の農家はここまで考えてないですよね。今富も物をどう売るかしか考えてなくて、新しい物を取り入れて新しいことというのは一方たぶん、今富さんが言った「異人」ですよね。その人じゃないとできないと思います。

創造創出／アドバイザー
Satoshi Goto
後藤 智史 さん
大分市出身、36歳。大分ベンチャーキャピタル・ベンチャー投資グループ課長。1998年大分銀行入行。支店勤務など を経て2009年から現職。

下川　今のような多いっぱいの取り組みについて、田中先生いかがですか。

田中　うれしいです。

下川　いろんなアイデアが出ました。すごに実現できないかもしれませんけど、これを実現させていこういうことで、きょうはそのきっかけだと思います。分科会ごとにミライキーワードを出していただきました。再度各コーディネーターの皆さんに発表してもらいたいと思います。

宗岡博之（1次産業分科会）　キーワードというよりつなげてつのフレーズにした「ハレの日はくにさき便　海も山も召し上がれ」です。先はどハレの日と言いましたが、特別な時に食べる物と消費者に認めてもらえるような売り出し方ができればいいという思いと、農漁業もに質の高い物を作ろうと頑張っているので、一緒に売っていけばいいなという思いを込めました。

高野学（観光資源分科会）　1人1枚ずつ書いてもらいました。「夢」。夢を感じる観光が必要ではないかとのことです。「『国東』再発見」。シイタケなどおいしい物が埋もれているので、もう一度掘り起こそうということです。次の2枚は近いんですが「しあわせ実感のくにさき」、「日本一心落ち着く場所」。癒やしをテーマにしています。それから「縁」。ご縁があればリピーターになってもらえるんじゃないかという意味です。

帆足朋成（創造創出分科会）　非常にたくさんの意見が出て、一つのキーワードに絞れなかったので皆さんに三つずつ提示してもらいました。「伝統（伝承）、居場所と出番、異人」。先はども異人という キーワードが出ましたが、外からの視点で地域の人が気付かないかった地域資源に光が当たることによって、新たな魅力が生まれるんじゃないかということです。次は「特産品に頼らない、強い道づくり、田舎者＝カッコイイ」。この中で、強い道づくりですが、点と点を結ぶ・国東の入り口と出口を結ぶ・地域と地域を結ぶ強い道を造ることによって、外からの人を引き付け、地域と地域が結び付くんじゃないかということです。次は「引く、押す、犬」。引くとは、外からの人を引き付ける。押すとは、何かやろうとしている人を押し出し支援するということです。最後は「連携、行動、発信（伝える）」。行動とは、行動を起こすことによって何かが生まれるんじゃないかということです。

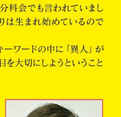
外から見た発想生かす

下川　田中先生ご覧になってどうでしょうか。

田中　連携はどの分科会でも言われていました。既に横のつながりは生まれ始めているのではと思います。

下川　今のミライキーワードの中に「異人」がありました。外からの目を大切にしようということでしょうか。

今富　もともと国東で今年、国東半島アートプロジェクトが開催され、その テーマが国東×異人です。国東自体がた郷満山文化が始まった当時は外から仏教が来た歴史があります。異人と書いて「まれびと」と読むのですが、外の文化を受け入れて新しい文化を創りだすという意味が込められています。地域にずっと住んでいるとだんだんと見えなくなるので、新鮮な外からの意見は次の活力につながると感じています。このプロジェクトも住んでいる人が、地域の魅力を知るきっかけになると思います。



創造創出／若手リーダー
Masayuki Imatomi
今富 正幸 さん
国東市国東町出身。1982年、東京経済大学卒業後UIターン。建築士、元民家園理事。地域おこし団体「国東活性化委員会」を設立、国東を盛り上げる。

下川　秋吉さん、まれびとの発想は大事だと思いますか。

秋吉　日本人は受け入れることが上手で、受け入れた後それをさらに生かすことができる人種だと言われています。外からの意見を受け入れて変化することはなの時代にも通じると思います。新しいものを取り入れる時に、残ったものと残したものというのは捉え方によって変わります。これから残していくものをきちんと区別、分別することが大切だと思います。ですので、外から異人を受け入れることも必要だと思いますし、それを基にあるものを見つめ直すことができるのではないかと思います。

連携をじわじわ広げる

下川　まれびとのお三方に一言ずつ聞きたいと思います。

森　すごくびっくりしました。外の人がそういう発想をすることは普通なんですが、中に居る人にその発想が地域にあることが素晴らしいなと。

井上　私も素晴らしい発想だと思いますし、得てして外からの人は排除されがちですので、意見として受け入れることは大切だと思います。

後藤　新しいものを受け入れても、根っこが深くないと人れ替わってしまうだけです。根っこの深さをすごく感じる会議でした。

下川　分科会を見ても確かに地域に根付いている人たちの発言だと感じました。もう一つミライキーワードの中で一番重要ではないかと思うテーマがありました。「連携」です。それぞれいることはやっている、いいものを作っているが連携がうまくいっていないのではというお話です。そういう状況が国東にはあるのですか。

総括コーディネーター
Hiroki Shimokawa
下川 宏樹
1989年大分合同新聞入社。社会部、白熱支局、整理部などを経て紙面リデザイン室長。45歳。国東を思う熱い連と、意識のレベルの高さを感じた。

都留　おのおのがいいものを作っているのは間違いないが、それが情報として営業種の方に伝わっていないと思います。

秋吉　宣伝活動などをしていけば、自分しか人がいない、自分は農作業からとか・現実論があり、そこを埋められていないのです。情報伝達の連携ができていないだけじゃないかと思います。そこを埋めるのは人と人とのつながりではないでしょうか。

今富　現時点では確かに連携は取れていないかもしれませんね。僕のイメージではそれぞれが持っているものをまだ磨いている段階。今温泉をキーワードに連携できないかという話をしていて、楽しみにしていてほしいですね。

下川　そうすると、連携できていない認識があり、解消しようという意識がもちろんあるということです。

今富　そうですね。それが一番重要で、さっき分科会で言われていた物語を創る意味でも連携していかないとできませんので、今後絶対必要だと思っています。

下川　ぜひ実現してほしいと思います。どこの地域でも連携が取れていないという課題が出ます。しかし、きょうのこの機会は連携の一歩で、初めて会った人同士もいますので、ちょっとお願いできる関係ができたんじゃないかと思います。そこをじわじわ広げていけば大きなうねりになるのではと思いますが、田中先生どうでしょうか。

田中　まれびとという話を含めて考えています。美術において地方に一番欠けていることが、地方に内在している批評性です。東京で評価された画家が地方に戻ると、「東京で評価された人」ですっといってしまい、地方で批評ができない。まれびとは必要ですが、自分たちの中から批評する力を育ていかなければと思います。批評しかう方向性を込めておかなければ、力強い連携は生まれないのかなと。その点で言うと地方紙の役割は重要ではないかと思っています。

総括アドバイザー
Shuji Tanaka
田中 修二 さん
京都市出身、44歳。大分大学教育福祉科学部准教授。成城大学大学院文学研究科美学・美術史専攻。博士。美術における「中央」と「地方」の関係が気になる。

飛んで行ける翼がある

下川　最後に課題を投げ掛けられました。おっしゃる通りだと思います。われわれは地域密着をテーマにしています。もっともっと密着し、国東にもっともっとレベルアップしてもらうため、いろんな情報発信をしていくことを約束します。国東には大分で唯一空港があります。いろいろ話して分かりましたが、皆さんにも翼があります。飛んでいく力があります。昨日を越えましょう。きょうを越えましょう。失敗を恐れずに前に飛んでみましょう。私たちと一緒に。動かなければ何も生まれませんん。もしそれがためならば、修正すればいいんです。とにかく動いて、新しい世界の第一歩にしていきたいという思いでいっぱいです。　きょうはせっかくミライキーワードをつくってもらって、この場だけでなくすのは非常に惜しいです。市役所の皆さんに提案ですが、市役所がアストくにさきのどこかに張り出していただけないかと思います。私どもの新年号のテーマが「エナジー」です。ということで、「国東エナジー」というコーナーを設けていただいて、皆さんのミライキーワードを貼りつけていただきたいと。そして市民が集まった時、余白にミライキーワードを書きふんでもらって国東の夢と希望を広げていきたいと思いませんか。どうでしょうか。ぜひやっていただきたいと思います。きょうをきっかけに飛躍する国東、飛躍する皆さんをお祈りいたします。これからも一緒に頑張りましょう。

※画像はイメージです。

大切なご家族を守る。情報を守る。そして、暮らしを便利にする。
進化した「新ホームセキュリティ」、誕生。

セコムのホームセキュリティが進化しました。どなたにも使いやすい、タッチパネル式の10.4型カラー液晶モニターを採用。防犯・火災監視・非常通報などのセキュリティサービスに加え、大切な情報を守る新しいサービスをスタート。暮らしに役立つ機能も追加しました。毎日を、もっと「安心」に。そして「便利」に。これが、ホームセキュリティの新しいかたちです。

ほんとうの「安心」は、ここにあります。
NEW!
セコム・ホームセキュリティ
G-カスタム

サービスについて詳しくは、ホームページまたはフリーダイヤルで。　G-カスタム　検索　0120-025756（レイコーゴーロクコム）（24時間・年中無休）　セコム株式会社

大分を学ぶ

神仏習合した六郷満山 奥深い宗教文化考える

国東市編　文殊仙寺

国立大学法人 大分大学
OITA UNIVERSITY
□臼野原キャンパス　〒870-1192 大分市大字臼野原700番地
□挾間キャンパス　〒879-5593 由布市挾間町医大ヶ丘1丁目1番地
□王子キャンパス　〒870-0819 大分市王子新町1番1号

［参加者］4年
澤田　知依
下坂　裕子
首藤　舞美

六郷満山に抱かれた仏の里、国東市。大分大学教育福祉科学部情報教育コースに通う私たちは、大学で学びを地域社会に生かすため、大分県内のさまざまな地域を訪ねています。今日は国東市に息づく仏教を学ぼうと天台宗願眉山文殊仙寺を訪ねました。

国東半島で花開いた六郷満山文化は、自然の中に神を見る信仰と古代仏教が融合して生まれた神仏習合の文化。山岳に多くの寺院が点在し、今もなお人々の信仰を集めています。

文殊仙寺のご本尊・文殊菩薩は人々に智恵と福徳円満の力を授ける母。深い森に包まれた寺院の様子からもこの地で受け継がれてきた山岳仏教を感じることができます。副住職の秋吉文椿さんにお話を聞き、写経を行います。静けさの中、墨の香りと和紙に向きう時間、心が落ち着きます。精進料理はどれも真心込めて作られた味。秋吉文椿住職は「自然の恵みやいろんな恵みに感謝して食べるのが日本の文化と話していました。

本殿の文殊菩薩像に見守られながら座禅を組みます。背筋を伸ばしていると思っていても、実際は背中が曲がっていたり、揺れたりするもの。自分の感覚の不確かさを教えてくれるのがそうです。禅の基本修業である座禅を通して仏教の精神世界を体験しました。

座禅の後、密教の修法である護摩焚きを行いました。薄暗い奥の院の中、経を唱えながら護摩木を焼やします。燃え上がる炎が国東に伝わる宗教文化の力強さを物語ります。

信仰する人たちの手によって現在まで守られてきた六郷満山の文化。神と仏が複雑に絡み合う国東の寺院には、数々の奇祭も残っています。人々を引き付けてやまない国東半島の仏教文化に接し、自然との共生や信仰の力について考えました。